

思
考
の
際
景

2006年10月8日に、室生山上公園芸術の森がオープニングを迎えた。ところは奈良県と三重県の県境近く、白土三平の『カムイ伝』に登場する地名も近隣という土地柄だ。最寄りの駅は近鉄の室生口大野駅。女人高野として知られる室生寺参詣のおりに下車した方も多いただろう。宇陀市の用意したマイクロバスを乗り継ぎ、さらに徒歩で室生寺を見下ろす峠を越えると南入り口に至る。案内所の先で、突然、眼下に眺望が開ける。初秋の山を背に幅100-150mほどの緩やかな谷が、巨大な龍よろしく大きな弧を描いて、南から北へとなだらかに下っている。能管の音に誘われて進むと、まずひとつ、湖が臨まれる。三つの円形の島が設えられ、そこを舞台として、すでに開会を記念する舞踊が始まっていた。

ステージの島は東西を橋で本土に結ばれ、南には赤錆びたピラミッドを擁した島に連結される。湖を囲む東西そして南の斜面には、ギリシアの野外劇場を思わせる階段状の座席が白く輝く。ステージを見下ろすこれらの揺鉢が、音響効果を確保する。離合集散を繰り返していた男女5人の踊り手たちは、やがて島を走り去って右手の棚田を下り、観客たちを誘いながら、稲穂の彼方、湾曲した溪谷遙か川下に位置する第二の湖へと、祝福の舞台を移す。ここには「天文の塔」と

連載92
潜龍の入魂儀礼 室生山上公園芸術の森 開会式

ダニ/ヤエル・カラヴァン夫人の日本行脚から

田
音
新
聞

2007
02
21

No-2811

監修 日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教授 稲賀繁美

名づけられた階段状の半円柱が、北緯34度32分の軸線上に聳えている。この軸線は近隣の室生寺、長谷寺から、遠くは伊勢神宮の齋宮跡、箸墓古墳などを東西に直線で繋ぐ。古代以来の太陽信仰の証として、写真家小川光三氏が「太陽の道」と名づけたものという。この軸に沿って板敷の遊歩道が谷を跨ぎ、公園を横切って貫いている。舞踊はこれらの結界を越えてさらに螺旋の水路から螺旋の竹林へと移動して地下にもぐり、再度地上に現れて、再生を寿ぎながら終了した。その突端の波型の土盛の源流には、西の端に「弘法の井戸」が湧いていた。

面積7.8haほどの谷間の細長い敷地は、地滑り対策事業の対象地だったが、ここに環境藝術家、ダニ・カラヴァンが招かれ、5年の歳月を費やして、「芸術の森」が整備された。本年76歳の彫刻家は、トレードマークの藍のハンチング姿。公共事業用地に棚田を復活させる案は、農地への転用に当たるため、最初は行政側の了承を得るのに苦労したという。地上への地下道は、初期のネグヴ記念碑から、スペイン、ポルト・ボアのヴァルター・ベンヤミン記念碑《パッサージュ》へと引き継がれたモチーフだ。場所の記憶を宇宙の調律と交響させる手法は、ここではダニの友人であった、室生出身の彫刻家、故・井上武吉の故郷に寄せる

遺志を継いで実現したものだという。

J.am.ダンス・シアターの面々とともに緑の回廊を縫って舞い、聴衆の注目を釘付けにしたヤエル・カラヴァンは、彫刻家の愛娘。ロンドンに学び、今はパリを根拠地とする闊達・聡明な女性だが、大野一雄の感化も歴然とする身のこなし。野外吹き出しのテント会場でも、すぐに地元の子供たちに溶け込んで、即席の遊戯に興じていた。招かれた場所の地盤にすばやく感応し、大地や大気との共振を、自己の表現へとすなおに昇華する天賦の才能は、父親譲りというべきか。

Karavanは「砂漠の隊商」caravanと同根だ。世界を行脚し巡礼をつづける芸術一家は、この日、16回におよぶ現地訪問でも前例なき快晴に恵まれた。だが、庭造りは一般公開とともに終了するわけではない。計画した迷路の実現は、なお将来の課題。いつもの素朴な飾らぬ英語で、ダニは聴衆に語った。庭の設計では、いかにその土地の持ち味を引き出すかが大切だ。地滑り対策の水路設計も委託された。責任の重さと思うと、眠れない夜もあった。だが、本当に難しいのは、今からだ。いったん完成した庭園を、いかに後世に伝えて行くか。五百年後、千年後にこの土地がどのようになっているか。そこには地域の人々、将来の子孫の世代による愛が不可欠なのだ、と。